





この設計プロセスが土地や地域資源等の条件に依存せずに他者との関わりを築けることを示すために、図1「文脈の無い」場所に建つ、周辺も設計中の施設を敷地として画定した。

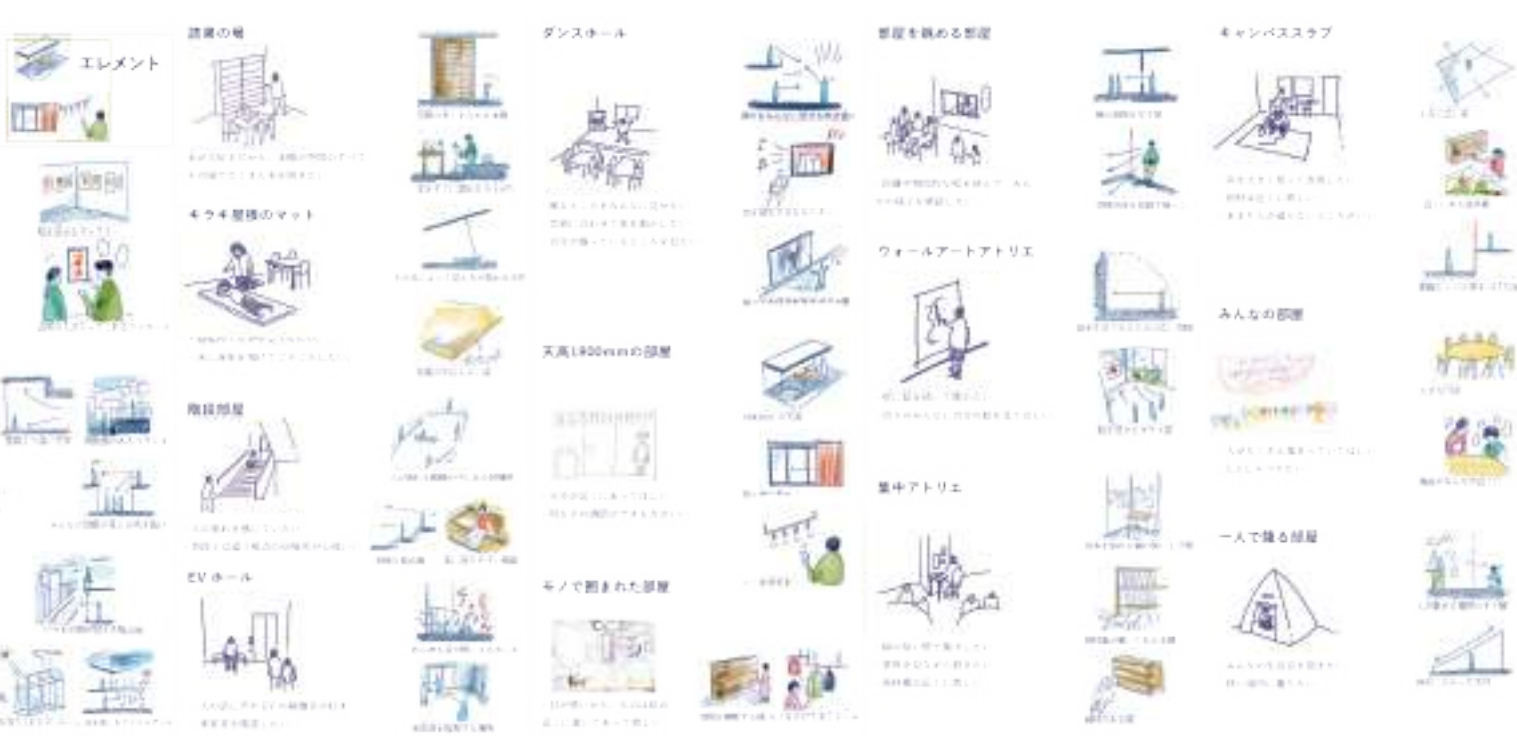
設計手法 個人の絶対領域をエレメントに分解する



知的障害者の絶対領域の特性として「形の不安定性が高い」「おぼろげに人の場所を長時間認識でき知覚がある」ことが挙げられる。これを利用して、領域を要素的に表現することを目指す。市民では調査結果を1年経過後、それぞれに配ったエレメントを無効化した。「翻訳」の作業は、一年間のたれ施設見学調査で得た施設利用者の動線、管理者との会談情報に基づいて行った。

## エレメントの重ね方

### 領域名3「ダンスホール」



これは14人の領域のうちの一つで、同時に動いている人の領域から生まれた空間である。この人に添ってエレメントは踊りをみんなに見せる動き掛け、自分を写すカメラ、手を添えるなどのこと。こまめな物の領域のエレメントと距離感や材料を考慮しながら組み合わせ、動きと併せるシーンを設計した。

エレメント同士の距離感を調整することで、明確な区別が生まれる区別し、緩やかにつながる領域のバージョンを組み合わせる。例えば、エレメント同士の距離が近い場合、領域の持ち手同士がより近い距離を築く可能性が高まる。一方で、距離が離れている場合、明確な区別は容易になるが、それぞれの領域の要素が広がり、明確なバージョンが影響を受ける。



絶対領域を構成するエレメントの配置  
関係や距離感を示す。  
そして、領域の持ち主が置かれている  
領域を主領域として記述する。領域の  
所有者は一日を通して大きな移動を行わ  
ないが、自分自身を領域の中に他者が干  
渉することや活動や学びのある領域を  
作り出す。

## 全体計画 大きな吹き抜けと放射状に広がる領域

### 中心の吹き抜け

階層の抜けを確保することで、領域同士  
の優劣や代々等やすと同時、動線や利用  
者を見守りやすい空間として機能する。

### 周辺建物側に必要空間

スカッパームを中心とした空間に配  
置することで動線が利用者を促  
しやすくなる。

### 領域を放射状に展開する

領域を放射状に配置することで  
どこにいてもみんな一緒になれるこ  
とを伝える役割に。

14 種の領域を回って見ると一つの領域のような建築を認める。絶対領域を放射状に配置  
すると同時に、大きな吹き抜けを設けることで階層の抜けを確保する。開け合った領域だけでなく、  
密閉された領域との境りを作ることもできる。さらに、階層にも利用者を促しやすくなる。

### 凡例



絶対領域一帯に主領域を配置するエレメント

### 4. 読書の場



本が置かれる領域、  
人々も本棚・机などが集まるため読み書き、読書の場  
が生まれる。

### 7. 階段空間



階段空間の持ち主が読書、  
読書の場を創出する役割を担い、その空間を創出する。読書の  
空間が生まれる。

### 9. 読書を読む部屋



読書を読む部屋の持ち主が読書、  
読書の場を創出する役割を担い、その空間を創出する。読書の  
空間が生まれる。

### 11. フォールアートアトリエ



フォールアートアトリエの持ち主が読書、  
読書の場を創出する役割を担い、その空間を創出する。読書の  
空間が生まれる。

### 13. 外を感じる部屋



外を感じる部屋の持ち主が読書、  
読書の場を創出する役割を担い、その空間を創出する。読書の  
空間が生まれる。



配置計画図 5-1-200



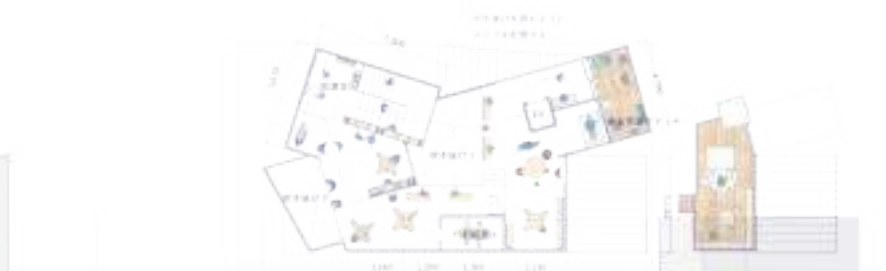
東側断面図 5-1-201



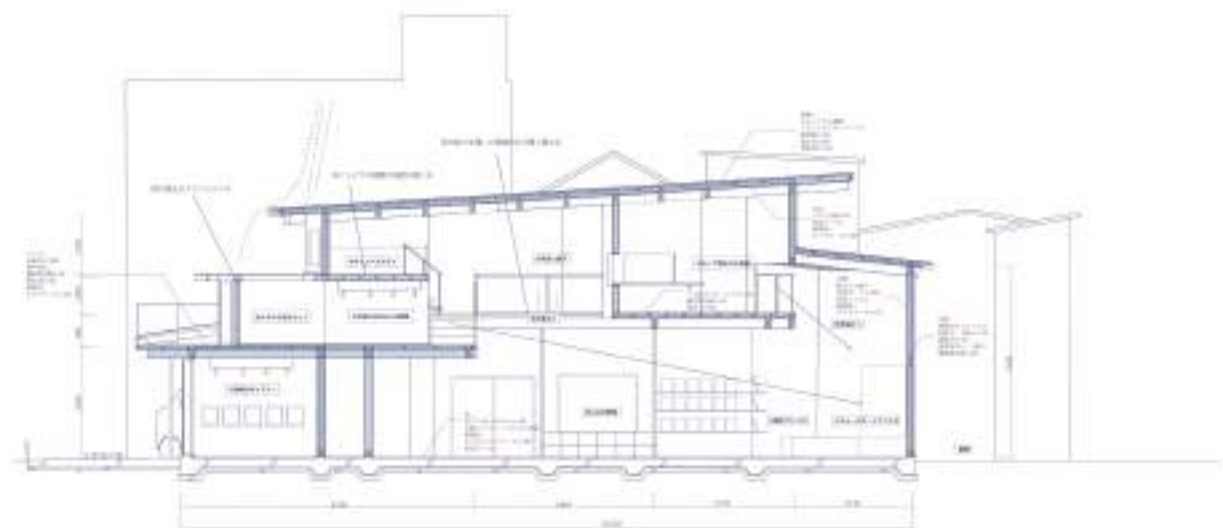
西側断面図 5-1-202



北側断面図 5-1-203



2F平面図 5-1-204



B-B'断面図 5-1-100



1F平面図 5-1-205

両者の設計環境を大事にしたゾーンの形成を意図することで、従来の鉄骨造みの型枠工法とは異なり自然に形が作られる。そして、1F部の絶対領域から作られた空間は同時により多くの利用者に開かれ、学びのある環境を作り出す。